

第四百七十回 青葉会句会報 令和七年六月二十六日(木)

句会場所…三軒茶屋 世田谷区施設 しゃれなあと6階 ビーナス

選者 川口孤舟

出席者 柿崎忠彦 川口孤舟 久米五郎太 後藤とみ子 在間千恵 佐藤ただしげ

豊田ゆたか 西澤國護 古田昇 星田啓子

投句・選句 熊谷くにお 小早健介 高橋康敏 田島正己 土谷堂哉 福島正明 古川百合子

山崎亜也 山田けい子 山内天牛 渡邊盛雄

選句のみ 伊賀山そらお、梅崎くすを 重枝孝岳 庄司龍平 高橋清子 橋口隆 早川允章

山本三恵



【互選句】 ◎は孤舟選者の選 選者欄(括弧内)の○は選者の「天」

十四点

◎戦なき八十年の水鉄砲

盛雄

(くす・弧・忠・と・健・清・隆・○允・
○正・百・○昇・け・○三・天)

九点

◎梅雨晴や百年蔵の醤油の香

くにお

(○そ・弧・康・堂・ゆ・國・昇・け・
天)

七点

秘め事のひとつやふたつ行々子

孤舟

(○くす・と・百・昇・啓・三・盛)

六点

◎自転車で畦道走る夏帽子

正己

(そ・弧・た・清・康・天)

もののけの縄文杉や山滴る

昇

(く・五・清・己・け・亜)

散歩道地蔵の横のあり地獄

けい子

(健・と・清・康・百・天)

五点

麦秋の風に帰心の昂りぬ

孤舟

(く・○孝・己・堂・三)

はや夏至か時歩まずに走りおり

健介

(千・龍・國・百・○盛)

澄む川にオフリーア見たり麦の風

千恵

(くす・五・と・龍・啓)

◎古書店に積まるる画集梅雨じめり

康敏

(そ・弧・健・た・昇)

古民家に人の賑わい青簾

正己

(く・○龍・ゆ・正・百)

水浴びの順番待ちの小鳥たち

百合子

(千・た・清・隆・昇)

◎来し方を想い出す日の籐寝椅子

盛雄

(そ・弧・た・允・三)

四点

恋蛩闇の匂と水の香と

孤舟

(五・と・孝・允)

青芝に寝て天穹に明日を描く

全

(孝・康・ゆ・盛)

月涼し沖の漁火煌々と

全

(そ・く・た・堂)

梅雨傘を手に地下街を迷ひけり

康敏

(くす・忠・堂・亜)

干草や濃き牛乳をひと息に
 ◎走り梅雨昭和の巨人一人逝く
 えご散るや走り根からむ石畳
 ◎いさかひの日毎深みへ梅雨に入る
 紫陽花に濃き青残し通り雨
 ◎シェルターを背負うて歩く蝸牛

とみ子
 康敏
 堂哉
 國護
 昇
 (千・國・け・天)
 (忠・弧・允・盛)
 (五・己・亜・三)
 (弧・健・隆・啓)
 (くす・た・ゆ・己)
 (弧・清・○隆・正)

三点

万緑や溢れんばかり土の息吹
 ありし日の旧師は眩し沙羅の花
 青時雨手の透かし見ゆ山の水
 春草の踏まれて径をなすところ
 天井の龍の目光るはたた神
 梅実握ぐ掌(て)に天鷲絨の触るること
 灼くる陽に今や見慣れしタトゥーかな
 空梅雨や二の腕白き少女達
 十葉や転んじや駄目と医者云ふ

忠彦
 五郎太
 とみ子
 國護
 昇
 啓子
 亜也
 けい子
 天牛
 (孝・國・ゆ)
 (忠・健・啓)
 (己・ゆ・亜)
 (健・龍・け)
 (く・康・け)
 (千・亜・盛)
 (そ・と・啓)
 (くす・五・允)
 (隆・正・盛)

二点

いくつものベルギービール飲み比ぶ
 ◎万緑や森蔭のジャズコンサート
 風薫る沙翁の家は傾けり
 江戸紫の色が好きなのクレマチス
 早苗田や逆さ伊吹の雄姿かな
 いにしへのままに夏越の祓受く
 半夏生モーリタニアの蛸サラダ
 北の海鳥賊が不漁でマグロ獲れ
 神妙に茅の輪を潜る異国人
 アイスクリンしやりんと甘い母の味
 幼き日小倉アイスに甦り

五郎太
 健介
 千恵
 全
 堂哉
 啓子
 とみ子
 ただしげ
 昇
 百合子
 亜也
 (忠・と)
 (弧・昇)
 (康・正)
 (正・亜)
 (た・允)
 (千・隆)
 (五・啓)
 (忠・ゆ)
 (く・堂)
 (孝・國)
 (千・百)

一点

心太か細い味の図太さよ
 雨しどど降りて色増す濃紫陽花
 夏来る鎌倉で買う鳩サブレ
 養塚の昼なほ暗し草いきれ
 白百合や鄙に希有なる喫茶店
 ◎鶉の群れの青空渡る影を見る
 小船より泳ぐ海亀鑑賞す
 雨に映ゆトルコブルーの額の花
 庭草を活けたる廊下簾鳴る

忠彦
 全
 全
 くに
 堂哉
 ゆたか
 全
 昇
 啓子
 (堂)
 (孝)
 (天)
 (堂)
 (ゆ)
 (弧)
 (龍)
 (國)
 (龍)

【句 評・短 評】

十四点句

戦なき八十年の水鉄砲

盛雄

弧舟選者・・・戦渦を知らぬ童は、無邪気に水鉄砲を相手に向けている。

とみ子さん・・・私達の世代は 戦争がない幸せな世代でした。いつまでも続きますように。

三恵さん・・・神様が、「バベルの塔」で人間の言葉をバラバラにしまったように、世界中のすべての武器、兵器を水鉄砲に変えてくださったらよいのに。端的ですが、アイロニーに富んだ、奥深い句。心に残ります。

隆さん・・・気軽に戦が始まる時代になった。水鉄砲のまま維持するには苦労が必要。

正明さん・・・今年に入って世界はまことにきな臭くやるせ無いです 同時に今回の句のなかにある「シェルターを背負うて歩く蝸牛」の句も悲しいです。

昇さん・・・戦争のない平和日本。兵器ではない水鉄砲が効いています。

百合子さん・・・戦後八十年の平和は蜃気楼だったのでしょか。平和の象徴(?)としての水鉄砲、詠みがまだまだ足りないでしよか。

天牛さん・・・何才の方の句かわかりませんが、戦争を経験した者には水鉄砲が効いています。平和はいいですね！

九点句

梅雨晴や百年蔵の醤油の香

くにお

弧舟選者・・・醤油蔵からの香りが、梅雨晴の風に乗って漂う。

康敏さん・・・陰鬱な梅雨が明けて、太陽が戻ってきた。人の心も明るくなる。醤油製造所の古い蔵からは水蒸気が立ち上り醬の香が漂う。しかし、最近の梅雨は猛暑が続く時に豪雨が降る。地球温暖化で季語の本意が現状と合わなくなっている。

堂哉さん・・・息子がヤマサに勤めています！ご愛用下さい！

ゆたかさん・・・百年の歴史がある蔵の醤油の香りが漂ってきます

天牛さん・・・妹が二人つくり醤油屋に嫁いでいますので百年蔵がよくわかります。玄関に入ると醤油の香がしたものです。

七点句

秘め事のひとつやふたつ行々子

孤舟

とみ子さん・・・行々子が 軽い気持ちの秘め事と教えているようです。

百合子さん・・・行々子相手に呟いたのでしよか。ひとつやふたつ、なくてどうする、たった一度の人生！

盛雄さん・・・この句の作者が女性なれば何倍も嬉しい。季語が効いております。

六点句

自転車で畦道走る夏帽子

正己

弧舟選者・・・井みどりの風もさわやかに にぎるハンドル心も軽く井 （小坂一也）
ただしげさん・・・懐かしい田舎の風景を思い出す。

康敏さん・・・自転車乗りにはヘルメット着用が努力義務になっているが、普及は遅れている。夏

帽子の方が颯爽とした感がある。

天牛さん・・・大昔ですが、戦争中に田舎の家へスイカを貰いに自転車で行ったことを思い出しました。

もののけの縄文杉や山滴る

昇

五郎太さん・・・もののけ姫のいる古くからの林、そこでの自然と人間の交歓。万博フランス館の展示の最初の場面を思い出しました。

亜也さん・・・ジブリの世界に「山滴る」を持ってきた功。

散歩道地蔵の横のあり地獄

けい子

康敏さん・・・お地蔵様と蟻地獄の取り合わせの妙。しかし、上五が説明的。

百合子さん・・・「地蔵の横の」に、ぱつーと光景が広がりました。

天牛さん・・・神社や寺の廊下の下の乾いた場所によくあり地獄を見て飽きませんでした。

五点句

麦秋の風に帰心の昂りぬ

孤舟

孝岳さん・・・爽やかな初夏の風を受け、ふと故郷の風景を思い起こす。懐かしさに急に帰りたいくなる気持ちがよくわかります。「昂りぬ」の表現が好ましい。

はや夏至か時歩まずに走りおり

健介

百合子さん・・・年々季節が走馬燈のように巡ってきます。まったく同感です

盛雄さん・・・歳月人を待たず、まさにその通りです。今回の秀作。

澄む川にオフィリア見たり麦の風

千恵

五郎太さん・・・ハムレットの恋人、漱石も見た川に上向きで浮かんだ美女を描いたミレイの絵が浮かぶ。麦の風が心地よく 旅の句として素晴らしいですね。

とみ子さん・・・麦の風が心地よく 旅の句として素晴らしいですね。

古書店に積まるる画集梅雨じめり

康敏

弧舟選者・・・古書肆の黴臭さは一年中だが。

古民家に人の賑わい青簾

正己

龍平さん・・・古い家到大勢の人？ 簾の色も変色した？ 素晴らしい

ゆたかさん・・・古民家に大勢の人が集まっている状況がいいです

百合子さん・・・古民家カフェですか。古民家と青簾、効いてると勝手に思いました。

水浴びの順番待ちの小鳥たち

百合子

ただしげさん・・・中七の表現が面白い

隆さん・・・意外と小鳥たちのルールかもしれない。

来し方を想い出す日の籐寝椅子

盛雄

弧舟選者・・・籐寝椅子で微睡めば、遠い日の事々が走馬灯のように。

ただしげさん・・・この気持ちが良く理解できる

四点句

恋蛍闇の匂と水の香と

孤舟

五郎太さん・・・無数の蛍が恋をする夜の闇に男も女もいる。上手ですね。

とみ子さん・・・現実離れた詩情ある趣きが 素敵です。

青芝に寝て天穹に明日を描く

孤舟

康敏さん・・・青々とした芝生に寝て、幸多き将来を構想する。

月涼し沖の漁火煌々と
孤舟
ゆたかさん・・・上を向いて寝て見る空は広くまた深いようすがわかります

ただしげさん・・・情景が浮かんできて楽しい
堂哉さん・・・綺麗な景色が目には浮かびます
梅雨傘を手に地下街を迷ひけり
康敏

堂哉さん・・・最近は大阪の地下街はますます迷路です！
亜也さん・・・迷つての焦りに濡れ傘の鬱陶しさが加わつての遣る瀬なさに同情。
干草や濃き牛乳をひと息に
とみ子

千恵さん・・・都会のパックの牛乳とは一味も二味も濃さも違い新鮮で美味しいでしょう！美味しくくてひと息に飲んでしまいました。

天牛さん・・・昔はこんな経験をしたこともありましたが、今や叶わぬ話です。うらやましい。
走り梅雨昭和の巨人一人逝く
ただしげ

弧舟選者・・・「わが巨人軍は永久に不滅です！」
盛雄さん・・・我輩はタイガースファンだが、王・長嶋選手は別格
えご散るや走り根からむ石畳
康敏

五郎太さん・・・えごは小さな花を上に向け落ち、それが一面に広がる。中七が巧みです。
亜也さん・・・「走り根からむ」で凡百を免れる上手さ。

いさかひの日毎深みへ梅雨に入る
堂哉
弧舟選者・・・イスラエル・イラン紛争の根は深いようだ。

健介さん・・・マイナス思考ながら、「梅雨に入る」がぴったり。一茶が詠みそうな句ですね。
隆さん・・・どこにいても諍いは絶えない。諍いの処理が人の世だと思ふ。

紫陽花に濃き青残し通り雨
國護

ただしげさん・・・雨上がりの紫陽花の描写が綺麗
ゆたかさん・・・紫陽花の美しさが目に浮かびます。

シエルターを背負うて歩く蝸牛
昇

弧舟選者・・・蝸牛は核戦争に備えて日頃よりシエルターという殻を背負っている。
隆さん・・・蝸牛の殻をシエルターに例えるとは流石。人間だってシエルターがある筈。しかし、デジタルでシエルターが剥がれる時代が来ているのではなからうか。

三点句

青時雨手の透かし見ゆ山の水
とみ子

ゆたかさん・・・透き通った水の様子がよくわかります。

正己さん・・・なんともいえない清涼感！

亜也さん・・・「青時雨」のいわば変奏。

春草の踏まれて径をなすところ
國護

龍平さん・・・何と言う句意展開の速さ
お見事

天井の龍の目光るはたた神
昇

康敏さん・・・雷光に映え天井画の龍の目が鋭く光る。天龍寺だろうか。

梅実掬ぐ掌(て)に天驚絨の触るるごと
啓子

千恵さん・・・桃ほどではないけれど梅の実を触ったときのあの産毛って確かにビロード感ありますね。繊細な感覚がよいですね。

亜也さん・・・あの感触を云い得て妙ですが、類句もありそうです…

盛雄さん・・・梅の実をビロードの肌触りと詠んだ作者の繊細な感性に敬服。

※句会にて・・・弧舟選者から「梅実」は「実梅」とするべきとの注意。

灼くる陽に今や見慣れしタトゥーかな

亜也

とみ子さん・・・日常に見かける景となりました。驚きます。

空梅雨や二の腕白き少女達

けい子

五郎太さん・・・梅雨の合間、暑い日に若い女性は惜しげもなく白い肌を見せる。かつて少女だった人の句でしょう。

十葉や転んじや駄目と医者が云ふ

天牛

隆さん・・・医者に通りありそう。病気を治したい医者とは病気も身の内と云う医者と。評論家小林秀雄は、医者にタバコを忘れてるぞと言われ、タバコを止めた。これも薬かもしれない。

盛雄さん・・・老人に対する医者の方の言葉。季語が良い。

二点句

いくつものベルギービール飲み比ぶ

五郎太

とみ子さん・・・ベルギービールには、色 味いろいろあり楽しいですね。

万緑や森蔭のジャズコンサート

健介

弧舟選者・・・炎暑の折、森の中の小暗い場所でのコンサートは涼やかだ。

風薫る沙翁の家は傾けり

千恵

康敏さん・・・青葉を渡ってきた風は心地よい。ストラトフォード・オン・エーボンのシェークスピアの生家は築数百年で、確かに少し傾いているが、未だしっかりしている。

江戸紫の色が好きなクレマチス

千恵

亜也さん・・・この強引さがイイ。上五の字余りはいつそ「むらさき」と振り仮名しましょう。もともと「鉄線花」ではこうは行かない。

早苗田や逆さ伊吹の雄姿かな

堂哉

ただしげさん・・・伊吹山の雄大さを上手く表現している

いにしへのままに夏越の祓受く

啓子

千恵さん・・・昔ながらの季節の行事も忘れられがちな今日この頃。でもそんな習わしもすっかり日常に取り入れているところが素敵です。

隆さん・・・自分の全てを分らないのに、人は理屈が好き。理屈を捨てたい年齢になった。

半夏生モーリタニアの蛸サラダ

とみ子

五郎太さん・・・この季節、輸入物の白い蛸をサラダに。

北の海鳥賊が不漁でマグロ獲れ

ただしげ

ゆたかさん・・・あべこべになっていることが面白いです

神妙に茅の輪を潜る異国人

昇

堂哉さん・・・日本の若者にこそ伝統を体感して欲しいものです。

幼き日小倉アイズに魅り

亜也

千恵さん・・・私も子供のころ好きでした。今はあまり買いませんがスーパのアイスのガラスケースで「井村屋」のものを見つけると籠に入れたくなります。

百合子さん・・・小倉アイズ最中は大好物でした！もち米で作った最中と相性抜群。

一点句

心太か細い味の図太さよ

忠彦

堂哉さん・・・大好物です。字面が面白いですね！

夏来る鎌倉で買う鳩サブレ

忠彦

天牛さん・・・今どき夏の鎌倉へ行くのは贅沢じゃないかと思ひます。鳩サブレを帰りに買われたのでしょう。

鵜の群れの青空渡る影を見る

ゆたか

弧舟選者・・・海鵜の大群が天穹へ吸い込まれてゆく。

小船より泳ぐ海亀鑑賞す

ゆたか

龍平さん・・・この鑑賞者はきつと長生きされますね タイパとか忘れましようね

庭草を活けたる廊下簾鳴る

啓子

龍平さん・・・情景が目にかびます。

六月句 以上



【次回青葉会 予定】 七月、八月ともに「誌上句会」となります。

◇誌上句会となりますので、句会日当日に選句表を配信致します。郵送の方には句会日に間に合うよう、選句表を投函いたしますが、七月は二十一日が旗日であるため、昨今の郵便事情から、遅れることがあるかもしれません。事情ご賢察の上、ご容赦くださいませ。

①七月句会日（選句表配信日）・・・七月二十四日（木）

ご出句締切日・・・七月十九日（土）中

選句締切日・・・八月三日（日）中

②八月句会日（選句表配信日）・・・八月二十八日（木）

ご出句締切日・・・八月二十三日（土）中

選句締切日・・・九月六日（土）中

※ご出句数は 7月8月ともに、日頃句会にご出席の方はいつもと同じ5句、ご投句の方は2句から3句を目途とさせていただきますが、この機会に、とご出句数が増えることがあります。まして、5句までは、受付させていただきます。

※この時期はご旅行やお盆行事にお忙しい時期と存じます。長いご旅行などで日程の問題あるなどそれぞれの皆様のご都合に極力寄り添いたく存じますので、右日程に問題ございましたら、当方（啓子）☎080・8870・8201）までご連絡頂きたく存じます。

【青葉会報】

一、六月の句会は十名のご出席。しばらくお休みされていたとみ子さんをはじめとして、海外旅行の昇さん、千恵さんのご出席も復活、また海外ではないにしても大阪万博を楽しまれたゆたかさん、五郎太さんも居られ、話題も多く華やいだ句会となりました。ただ六月にしてはあまりに暑い日々にみなさま会場に足を運ぶだけでも危険を感じる、と。次回の7月の句会は、8月の句会同様「誌上句会」とすることに決まりました。都合三か月間、お顔を見ることなく些か寂しいながらも、一樣にご納得、ほっとした思いも感じられました。

今回六月のご出句は、分かり易く、お気持ち共有できる句が多かったようで、今回の選句も楽しかった、とのご感想を寄せていただきました。

結果は御覧の通りで、盛雄さんが十四点という高得点、続いて九点に新潟のくにおさん、七点に孤舟選者とさすがベテランが並びました。おめでとうございます。

二、孤舟選者近詠

紅薔薇に触ればきつと火傷する
筍のみな土付きで寝かされて
桜桃のひとつひとつの自己主張
父の日のレシピ通りのカツカレー
かたつむりゆつくり刻の過ぎゆけり

【関係者近詠】

警報級の大雨連れて梅雨に入る

盛雄

パソコンを新品に替へ梅雨叩く

隆

☆

初女性牧師は猫と山笑ふ
春寒し牧師も信徒も重荷負ふ
陰口を和の糸口へ花ミモザ
響灘に仰ぐ飛燕とドクターヘリ
老桜の店守り人の出入り見ず
東京の水へ口開く十三蜆
隅々をほぐすもつぎほ蒸鱗
花杏雀ひと蹴り枝を移る
づかづかと地の鳩も見ず卒業子
錆びて身の朽つるを望みマグノリア
紅白の落ちて混ざらぬ藪椿
愛すれど言葉にならず花ミモザ

眞希子	全	夜明け前馬籠の宿の春炬燵	青史
全	青き踏む水に流せぬ蟠り	全	
全	大和し美し都大路の花吹雪	全	
全	鳥雲に一人の日々の独り言	全	
弘子	月命日レタス千切つてマヨネーズ	全	
全	フランスパン二つに折るや花吹雪く	全	
全	雁帰るお年玉哀しや無縁坂	全	

森の座 六月号 選…横澤放川（日経俳壇選者）

令和七年七月七日

（了）